

教宣 せぶん

「紫陽花」革命に参加し 懇親会開催

「歴史的な場面に立ち会わないか?」。OBのそんな一言から急遽この日の行動が決まりました。



いま、関西電力大飯原発の再稼動を決めた政府に抗議する一般市民のデモが、毎週金曜日、首相官邸前で行われています。このデモは、インターネットやツイッターなどからの情報発信によって自然



発生的に起こったもので、日本版“中東の春”と呼べる



ものです。時期的に、「紫陽花（あじさい）革命」と名づけられたこの日本の市民運動は、週ごとにその規模を増し、7月1日の大飯原発の再稼動を直前にした6月29日のデモへの参加が、ネット上、広く呼びかけられました。

本紙でも、福島第一原発事故以来、日本に巣食う利権構造の実態について書いてきましたが、“原子カムラ”の一角を占める大手メディアは決してこうしたデモを伝えようとしませんでした。しかし、この日集まった“20万人”という市民のパワーの前に、濃淡こそあれ、



大手メディアもこのデモを報道せざるを得なくなりました。この市民のパワーが、さらに広まっていく可能性があります。

デモでは、多くの人が“脱原発”と書かれた手製のプラカードを掲げ、「再稼動反対」を連呼しました。しかし、このデモの本質は、日本に巣食う“米”“官”“業”“政”“報”の利権構造への「NO」であるこ

とは明らかです。「テレビに向かって怒ったり、嘆いたりしてもどうにもならない。具体的な行動に打って出なければ日本は沈没する」という呼びかけ人のメッセージが心に響きました。歪められた報道に踊らされることなく、真実や事実に触れ、具体的な行動を起す時が「いま」なのかもしれません。

私たちも、いま、業績賞与算出スキームの見直しについて、多くの従業員にその事実を知らせ、従業員の働きが反映される制度にするべく、社内世論に訴える運動を展開しています。事実を共有し、「おかしいことはおかしい」と行動を起していくことが求められていますし、これこそが現状を改善させていく基本です。



この日のデモに参加し、どんな時代であれ、どんな状況であれ、この「基本」は変わらないことをあらためて感じました。そして、この日全身で感じた市民運動のパワーなら、日本の悪しき構造を変えられるかもしれない、という「予感」を覚えました。